特集

特集　健康と主観的厚生の地域差－地域・まちづくりの展望－

「基調講演に対するコメント」

小　嶋　大　造（京都大学経済研究所　准教授）

中谷先生，小塩先生，非常に興味深い講演をありがとうございました．とても勉強になりました．私自身，先生方の研究分野に関心をもっていますが，必ずしも専門ではありませんので，ここでは講演に対するコメントというよりも，後のフロアとのディスカッションにつなげる意味で，私なりに，先生方の講演の積極的意義を申し上げた上で，問題提起の形で議論の素材をいくつか提供させていただきます．

まず，中谷先生の講演の積極的意義について，三点申し上げます．第一は，米国で実証研究が進んできた「健康の地域格差」について，日本においても，小地域・近隣レベルの空間スケールにまで迫って可視化されたこと．第二に，個票等の複数のデータを合成し，地理的剝奪指標を用いて，健康関連の地域特性を特定されたこと．第三に，「健康の地域格差」をうむ背景にある構成効果や文脈効果にも目配せされていること，です．

次に，小塩先生の講演の積極的意義について，三点申し上げます．第一に，所得格差や貧困など地域レベルの指標と，主観的な健康感や幸福感など個人レベルの指標の関連をマルチレベルで分析されていること．第二に，個票を活用した明解で手堅い実証をされていること．第三に，経済学ではいまだ発展途上にあるソーシャル・キャピタルの研究領域に切り込み，新しい知見を提示されていること，です．

続いて，問題提起の形で議論の素材をいくつか提示します．

まず，両先生の講演に対して，その後に，それぞれの先生の講演に対して申し上げます．

まず，両先生の講演に対して，三点申し上げます．

第一に，幸福感など主観的厚生を説明する変数として，絶対的所得水準や所得格差の他に，相対所得もあり得ますが，これをどう考えるかということです．戦後数十年間にわたる日本人の生活満足度は，一人当たりの実質支出が大きく向上したのに，ほとんど一定であったという「幸福のパラドックス」という議論があります．通常の経済学的な想定では，厚生は消費や所得が増えれば高まりますが，この現象はそうなっていない．このパラドックスを説明するために，相対所得仮説などが用いられます．仮説の詳細は省くとして，主観的厚生は，絶対的な所得水準というよりも，他者と比較した場合にどれぐらい乖離しているのかという相対所得というものが説明のキーになるのではないかという議論です．これと似た議論ですが，日本人の主観的階層意識は，あるアンケートによると，バブルの前も，バブルの後の景気低迷のときも，5階層（上・

中の上・中の中・中の下・下）の中で，自分は第３階層（中の中）に属すると思っている割合が５割を超えています．この間，絶対的な所得水準は変化していますが，絶対的な所得水準にかかわらず，自分は「中の中」にいるというような意識をもつ傾向があり，この主観的階層意識が人々の主観的厚生を左右するような要素となっている，つまり，日本の場合，自分が中流にいるかどうかという主観的階層意識が，主観的厚生を左右する要素となっているのではないか，ということです．これは，小塩先生が，欧州と米国では所得格差と主観的厚生の関係が異なると指摘されていますが，日本においても，格差論を検討する上で示唆するところがあると思います．所得の問題は，その絶対的な水準とともに，相対的な分布も重要です．日本では，かつての所得水準にあたる中間層が薄くなっていくなか，自分が中間層に属しているかどうかという主観的階層意識と現実とが乖離していけば，経済的な問題だけでなく，潜在的な社会の不安定要因になるという面もあろうと思います．これはかなり広がりをもつ問題です．

第二に，ソーシャル・キャピタルを適確に表現する指標として，どのようなものが考えられるかということです．ソーシャル・キャピタルの指標として，講演では，一般的信頼感が用いられていますが，一般的信頼感だけですと，ソーシャル・キャピタルのもつ社会とのかかわりのような広い意味合いがなかなか出ないのではないか，他方，ソーシャル・キャピタルを示す定まった指標群があるわけではなく，論者によって様々です．ソーシャル・キャピタルの指標としては，例えば，パットナム『孤独なボウリング』では，アメリカのケースですが，コミュニティ組織生活，公的問題への参加，コミュニティボランティア活動，インフォーマルな社交性，社会的信頼などがとられています．また，パットナム『哲学する民主主義』では，こちらはイタリアのケースですが，優先投票，国民投票参加度，新聞購読，スポーツ・文化団体の不足などがとられています．日本のケースですと，稲葉『ソーシャル・キャピタル入門』では，信頼，交流，参加などがとられています．

第三に，被説明変数として，健康感や幸福感といった主観的厚生をとる場合，どのようなことに気をつけるべきかということです．これは，いささかテクニカルなことですが，主観的厚生を取り扱う場合，クロスセクション分析（between-individuals）では，個人間で基準が相違するという個人間比較の問題がありますし，パネル分析（within-individuals）では，個人内で時間とともに基準が変化するという個人の異時点間比較の問題があります．また，説明変数と被説明変数がともに主観的指標の場合，例えば，説明変数が信頼感，被説明変数が幸福感や健康感の場合ですが，両者に内生性の問題があります．前者が後者を説明するとともに，後者が前者を説明するという逆の因果もあり得るわけで，これは内生性の問題になります．

この第三の点に関連して，被説明変数として，主観的指標だけでなく，すでに取り上げておられますが，客観的指標も採用してはどうかという点もあります．例えば，健康と主観的健康感の関係ですが，主観的健康感も重要な指標ですので，消極的な評価をするつもりはまったくありませんが，他方，健康と主観的健康感の間には乖離がある場合があると

いう指摘もされています．セン『正義のアイデア』では，インドのケララ州を事例に，客観的な健康水準は高いのに，健康感がどの州よりも低いと指摘されています．医療が整備されている地域では，自分の健康状態がよく分かるゆえに，健康感に敏感になるということです．また先進国の研究では，病状が悪化しても患者のQOLは必ずしも低くならない，いわゆるレスポンスシフトや，加齢に伴い福祉（well-being）の基準が変化する，といった報告がなされている例もあります．日本の例では，主観的健康感と生命予後の関連性は，男性では有意だが，女性では有意でない，という研究もあります．主観的健康感は重要な指標ですが，それだけではなく，健康に関する客観的指標も取り入れていくべきではないかということです．この客観的指標の関連でいえば，先ほどのソーシャル・キャピタルの例でいいますと，パットナム『孤独なボウリング』では，次のような指標が用いられています．児童福祉，教育達成，子供のテレビ視聴，殺人率，健康，脱税，所得の公平性です．この中に健康がありますが，この健康の指標は，主観的健康感の指標ではなく，客観的指標です．例えば，健康保険未加入率(-)，1人当たりの個人的医療費支出(-)，推定新規がん患者率(-)，プライマリーケアが利用できない人口割合(-)，成人喫煙率(-)，成人肥満率(-)，面積あたりの地域病院数(+)，人口あたりの地域病院ベッド数(+)，などといった20以上の指標がとられています．

以上が両先生の講演に対する議論の素材です．次に中谷先生と小塩先生のそれぞれの講演に対して，簡潔に三点ずつ申し上げます．

まず，中谷先生の講演に対してです．第一に，議論の出口として，あるいは政策的なインプリケーションとして何が考えられるかということ．第二に，健康な生活の保障は，セーフティネットとして，政策目標となりますが，主観的健康感の格差是正は，補完的な指標としては重要な役割をもつと思いますが，政策目標それ自体にはなり難いのではないかということ．第三に，空間的把握の強みの一つは，一般的傾向と異なる地域として，例えば所得水準が低くとも健康水準の高い地域が特定できる，といった点がありますが，この意味で「Roseto Mystery」は興味深い事例であり，日本でも，具体的事例から，政策的なインプリケーションを引き出せないだろうかということ，です．

次に，小塩先生の講演に対してです．いずれもソーシャル・キャピタルに関することですが，第一に，経済学でソーシャル・キャピタルの研究が進展しないのは，ソーシャル・キャピタルの概念が経済学的に馴染まないからではなく，データ制約のためではないだろうかということ．第二に，ソーシャル・キャピタルの研究は，経済学においても，データを構築していけば，潜在的な可能性を秘めた分野といえないだろうか，このためにも，ソーシャル・キャピタルについて一定の理解の共有が重要ではないかということ．第三に，今後のソーシャル・キャピタルの研究の方向性や課題について，どうお考えになっているかということ，です．

最後に，このソーシャル・キャピタルの研究に関連して，一言付け加えておきます．ソーシャル・キャピタルの研究が進展しないのは，アローやソローの論文を引いて，ソーシャル・キャピタルの概念が，経済学の想定す

るキャピタルの概念とかけ離れているから，という指摘もあります．しかし，注意しておきたいのは，確かにソーシャル・キャピタルの概念はそのような面があるかと思いますが，それをもって経済学ではソーシャル・キャピタルを扱うのは困難というのは言い過ぎではないか，ということです．アローの論文（“Observations on social capital”）では，最後のところで，ソーシャル・キャピタルという言葉を使わず，ソーシャル・リンクス（social links）という言葉を使っていますが，次のような問題提起をして締め括っています．重要かつ長年にわたる問題，それは「マーケットが，効率性に正の意味合いをもつ社会的なつながり（social links）を壊してしまうかどうかである」．これを逆に言えば，社会的なつながりは，マーケットの負の影響を防ぐ機能をもつかどうか，と言えます．こうしてみれば，言葉の問題は別として，ソーシャル・キャピタルが意味するところのものは，経済学的にも重要なテーマになると思います．この意味で，ソーシャル・キャピタルの研究も，データの構築が整備されていけば，可能性を秘めた研究分野になってくると思います．

以上，私からの議論の素材の提供です．

（コメント終了）

ディスカッション

小嶋先生分

○**司会**　ありがとうございました．何か追加でいかがですか．

○**小嶋**　中谷先生，小塩先生，リプライをありがとうございました．大変勉強になりました．